

国頭村教育委員会、安波小、北国小・佐手小集合学習の参観

2月6日(木)東京の帝京科学大学石橋裕子先生。同じく東京のこども教育宝仙大学の林幸範先生の2名が国頭村の教育施策と委員会としての取り組みのお話と、村内の小学校の学校訪問に訪れました。

私の方から村の教育施策や取り組みへの経緯の説明と、現況の7つの小学校の様子を授業写真等で説明させていただきました。学校訪問は、今回も安波小学校と北国小・佐手小の集合学習における算数授業と体育の授業を参観させていただきました。

安波小、北国小、佐手小学校の皆様。大変お世話になりました。二人の先生方も、大変満足された様子で帰路に就くことができました。「学校を開く」・「教室を開く」公共の理念の実践に感謝します。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

1・2年生 【何番目でしょう。】デジタル教科書を電子黒板に投影する。



写真①



写真②

写真①、2年生の後に1年生の女の子が説明する。じつに堂々としている。「まちがえること」や「たどたどしい言葉」は、全然気にされていないのである。「あなたの言葉で話してごらん。」自分の考えに自信を持てる教室が準備されている。写真②③、誰かが困っている、仲間の「分からない」が決して無視されることはない。授業者は支援を要する子に関わる時間が多くなるが、教室の仲間たちはそれを素直に受け入れている。2年生は1年生に積極的にかかわっている。義務的に果たされているのではなく、実に自然に当たり前に進められている。

写真④、授業終了後も先生に「ねえ聞いて」である。彼女がほしいのは何？



写真③



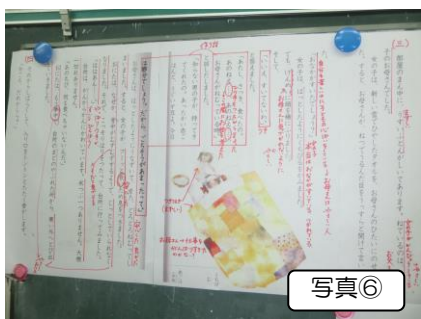
写真④

3・4年生 【おにたの ぼうし】読み

私の感想である。ズバリ！「授業者が、子どもの文学への親しみを楽しんでいる。」写真⑥の書き込み、文学の「味わい」はそれぞれでいいのである。僕なりの親しみを大切にしてほしい。



写真⑤



写真⑥

お母さんに心配かけたくない女の子の心にせまる。「お母さんを心配させたくない。でも嘘はいけない。でもお母さんは安心してくれる。」

結論は各々でいいのです。二人の間で交わされる対話にそれぞれの個性や感性を感じる。そこに互いの「学び」があるのです。

対話のキーワードとなった文
 ・女の子が、フーッと長いため息をつきました。
 ・背中がむずむずするようで。
 ・「ははあんー。」
 ・米つぶひとつありません。
 教師も、二人の感性から「学ぶ」を大切にしてください。

へき地校である。限界過疎地域と言っても過言ではない。食堂や弁当屋さんなどない。訪問前にコンビニで弁当を買って来て今回も安波小の給食と一緒にもらった。純粹で無垢な子ども達との会話に二人の先生も顔がほころぶ。都会にあってここにないモノはたくさんあるが、都会にはないモノがここにある。さてなに？

私たちが学校教育で果たさなければいけない学校の使命はなんだろう。

大都会からわざわざ来られた二人の先生方は何を感じたのだろうか？



【北国小・佐手小算数科集合学習】・・・両校の算数授業の単学年化を目的に週2回実施。

【1年生】北国小1名、佐手小2名の女の子3名である。担任は佐手小の先生が担当している。授業者は子ども達の思考を促すためにお菓子や、お金の半具体物を準備し、対話のつながりや思考のお手伝いをする。

【問い】48円のお菓子和。47円のお菓子を買うのにお金はいくら持っていけばいいですか。

○二人の女の子は50円玉を2枚持っていくとそれぞれが買えると答えるが、手前の女の子は最初から100円玉1枚を手にしていて。なんともう片方の手にはおつりの5円が準備されていた。・・・びっくりである。

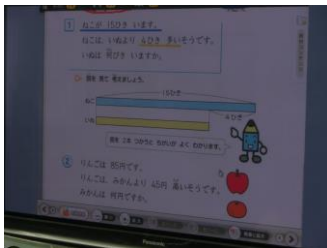
女の子は日常的に近くの売店で買い物をしているらしい。つまり女の子は日常生活が学習の理解につながっていたのである。私たち教師はいつも、基礎・基本から活用へと考えることが通説であるが、日常の活用（日常の技能）が基礎学習で確かめられる一つの例であるともみれる。

基礎的・基本的な知識や技能は、活用されて初めて「学力」となり、その人の生きる糧となる。



【2年生】北国小1名、佐手小1名のこども女の子2名である。さてどう思います。集合学習にしても2名なのです。佐手小、北国小にも欠学年はあります。子ども達の学習効果のためには少しでも、できることは何でもやってあげたい教師たちの真心に感謝です。

【問題】ねこが15ひきいます。ねこは いぬより 4ひき多いそうです。いぬは 何ひき いますか。



ここでも授業者は、算数的作業を仕込む。二人しかいない、どんな状況でもやらざる負えない。一人がサボると両方が孤立することになる。いつも一緒にいる仲間である。お互いに気づかいながら淡々と作業が進められる。たどたどしい作業に授業者がどこまで我慢できるかである。大人が手伝ってしまうとどうなるだろう。



【4年】北国小1名、佐手小2名 計3名 指導者：北国小教諭

【問題】 $\frac{1}{2}$ $\frac{2}{4}$ $\frac{4}{8}$ どちらが大きいですか。



写真⑦

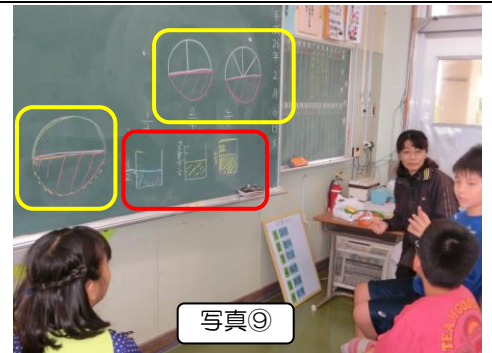


写真⑧

写真⑦、それぞれの考えをホワイトボードに書き説明する。そして吟味に入る。はじめの予想は2名が8分の4が大きいと発言していた。しかし数直線を使ってあらわした仲間の図を見て「あれ、やっぱりおなじかな？」

写真⑧、リットル図に書かせる。書く作業も子どもにあずけ、図に示しためもりが分母になることをみんなで確認した。「あ〜、分母は分けた数だ」しかし、まだ一人の男の子が同じ大きさであることに腑が落ちない。

→写真⑨のアドリブの発問につなげる。



写真⑨

授業者は、納得のいかない男の子に、ホットケーキの図を書かせ2分の1、4分の2、8分の4を食べたことを図で表現させた。

「あっ！同じ大きさ食べている。」男の子のもやもやがストン！と落ちた。…笑顔である。

授業者のアドリブの課題提起に脱帽である。この場の状況、男の子の関心や実態を踏まえてとっさに出たアドリブに子どもが救われたシーンである。プランだけではこうはいかない、授業はデザイン（創造）である。

【全校体育】サッカー



2校で17名。強いも弱いも、大きいも小さいもみんな最高に楽しむ。『幸せってなんだろう。』上の写真は作戦会議、作戦を進めるのは上級生だが、ほとんど1・2年生の意見で決まる。それでいい！この柔らかな空気を後輩達へ、そして各々の未来へつなげたい。